

[概要]

本稿では、様々な困難を抱え社会参加から撤退した人々の再社会参加において、通所型共生ケア施設のコミュニティハウス「ひとのま」が果たす役割について、利用者に対する聞き取り調査に基づき、「ケア空間」と「あいだの空間」という分析概念を用いて検討した。利用者の多くはひとのま利用開始当初、家族や家から離れられる日中の居場所確保、住居確保などを目的としてひとのまを訪れており、必ずしも社会復帰の中継地としての認識を持ってひとのまを利用し始めるわけではないことが分かった。しかし、彼らは利用回数を重ねるうちに、ひとのま代表の宮田氏や他の利用者と対等の立場で、肯定的配慮や共感的理解の態度で形成される「ケア空間」を通して新たな主体性を獲得し、社会参加に必要な能力を多数の他者との交流の中で身に付けていた。ひとのまは、「ケア空間」という社会空間であると同時に、就業、就学、障害者支援など利用者の外部社会進出を柔軟にサポートする能力を有しており、さらに、社会復帰後の利用者の介在により「あいだの空間」として機能することが明らかになった。

ひとのまは対象者を制限せず誰でも受け入れる施設であり、富山県内の困難を抱える人々にとって、社会参加の中継地であり同時に彼らの居場所となる重要な物理的・社会的空間としての役割を担っているといえる。